

ID No.	2121
研究課題名	線維性癌間質反応を指標にした大腸癌の新規治療標的分子の探索
研究代表者	望月 早月 （防衛医科大学校・学内講師）
研究組織	
受入教員	志田 大 （東京大学医科学研究所・教授）
研究分担者	岩崎 寿光 （防衛医科大学校・助教） 永田 健 （防衛医科大学校・大学院生） 田代 恵太 （防衛医科大学校・大学院生） 安部 紘生 （防衛医科大学校・大学院生） 上野 秀樹 （防衛医科大学校・教授） Ines Nearchou （日本学術振興会外国人特別研究員）
研究報告書	
癌細胞が浸潤する際に線維芽細胞等が増生して間質が形成される状態を線維性癌間質反応（Desmoplastic reaction: DR）と称するが、当教室では、原発巣のDRをImmature、Intermediate、Matureの3群に分類する「DR分類」を提唱し、これが大腸癌の予後予測指標として有用であることを見出している。本研究では、プロテオミクス法を用いてimmature由来がん関連線維芽細胞（Cancer-associated fibroblasts: CAFs）とmature由来CAFの培養上清やエクソソームを抽出し、それぞれで高発現するタンパク質を中心に網羅的・包括的な新規治療標的分子の探索を行った。 2021年度は、東京大学医科学研究所の疾患プロテオミクスラボラトリーを利用し、来所での研究打ち合わせやZOOMでの研究打ち合わせ、メールでのサンプル調整に関する詳細な打ち合わせを行い研究を実施した。これまでに癌治療抵抗性に関わると報告されているAnnexin A6（<i>Cancer Res</i>, 2020; 15:80:3222-323）などの分子がmature由来CAFのエクソソームで高発現のデータが得られており、今後もサンプル数を増やして解析を継続する。	